



ボランティアの集会で、日赤要員としてごあいさつ

セブ通信

フィリピン・セブ北部地域保健
衛生事業の現場から

vol. 8

2018. 8. 20 田村 由美

フィリピンでやったこと、考えたこと

先日、派遣期間を終えて日本に帰ってきました。セブ通信最終回では、約10か月の派遣のまとめとして、この派遣を通して感じたこと・学んだことを書きたいと思います。

地域保健事業と私の役割

私が派遣されていた「フィリピン・セブ北部地域保健衛生事業」は、地域の人々や児童がより健康に生活できるようにするために、健康や衛生についての正しい知識や実践を普及するものです。病気やけがをした人を治療したり看護したりするのではなく、病気やけがをしないように、また病気やけがをしたときに初期対応ができるようにするために、啓蒙活動を行っています。

なので、例えば「地域住民の〇〇%が、デング熱についての正しい知識を習得した」「児童の□%が手洗いの習慣を身につけた」ということが、事業の成果をはかる指標の1つとなっています。赤十字ボランティアが村でセミナーを開いたり、各戸を回ったり、小学校で課外活動をしたりして、パンフレットの配布やワークショップを行っています。また、人々の知識や習慣の変化（＝事業の成果）をはかるために、活動の前後に質問紙を用いて調査を行います。

私の仕事は、ボランティアやフィリピン赤十字社のスタッフの活動の状況をモニタリングし、活動が計画通り進んでいるか、ボランティアやスタッフが何に困っているかを知り、解決策と一緒に考えることでした。例えば、ボランティアに正しい調査を行うための質問の仕方のコツをアドバイスしたり、ボランティアの参加率が振るわないとスタッフが悩んでいたなら、出席を取って現状を把握し、活動によく参加するボランティアを表彰するよう提案したり。地域保健に関す

る知識だけでなく、パソコンスキルや経理、チームや組織、社会の仕組みなど幅広い知識や経験が必要で、手ごたえを感じたこともあれば、「もっと知識があればうまくいったかもしれない」と悔しい思いをすることもありました。フィリピンの人々の助けになればと思って行った派遣でしたが、ボランティアやスタッフに助けられたこともたくさんありました。

人々の生活習慣と健康問題

事業対象の村の多くで問題となっている下痢は、手洗いの習慣がないことが大きな原因だと感じました。フィリピンでは食事の前やトイレの後に手を洗う習慣が、水道のある場所でもまだあまり定着していません。裏を返せば、手洗いの普及によって下痢性疾患の減少が期待できます。

食生活の変化は、高血圧や糖尿病の増加につながっています。アクセスの悪い村の売店でも、インスタント麺やチョコレートやスナック菓子、炭酸飲料が売られています。街にはファストフード店が乱立しお客さんであふれています。日本においても言えることですが、新しいものや便利なものは急速に広がっていきますが、ものとともに正しい知識も広めていくことが大切だと感じます。人々の習慣を変えることは簡単ではありませんが、事業を通して地域の人々の健康問題が改善していくことを願います。

派遣を終えて

このように病院とは全く異なる仕事内容だったわけですが、初めてのことも多い中で、病院での経験が役に立った場面もたくさんありました。派遣まで多くのことを教えてくださり派遣にあたって応援してくださった病院職員のみなさまと患者さまに、心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。



事業スタッフとミーティング

このときは資金繰りについての相談でした。病院だとお金にはほとんど関わりませんが、3千万円以上の資金が動く事業を任されて身の引き締まる思いでした。慣れない仕事内容に、表や電卓とにらめっこしては「う〜ん」と頭を抱えていました…。



広報活動も仕事のひとつ

このセブ通信の他、日赤本社の国際ニュースを書いたり、現地の新聞に取り上げてもらったりしました。事業だけでなく、日赤の活動や国際派遣、フィリピンのことなど、少しでも多くの方に関心を持っていただければと思います。読んでくださった方々、ありがとうございました。